

## ○洛北

まずは、金福寺へ行く。鉄舟和尚が、俳人芭蕉を慕ってここに芭蕉庵を結んだという。和尚の没後、荒れていた芭蕉庵を蕪村が整備したのである。その蕪村の墓は、芭蕉庵の裏の山腹にある。さらにこの近くに詩仙堂があり、漢詩文家石川丈山が、江戸初期の寛永十八年（一六四一年）に隠棲所として建てたものである。三十六歌仙にちなんで、漢詩人三十六人の肖像を狩野探幽に描かせ、自身で賛を書いて壁に掲げたので、詩仙堂とよばれた。さらにその近くに曼殊院があり、天台宗門跡寺院であるが、古典関係では曼殊院本古今集が著名である。東山の青蓮院に似て趣のある寺である。またこの付近には、雲母坂があり、太平記にも登場する。そして策略家の帝王でもあり、式子内親王の父でもあった後白河院の撰述した今様歌謡染塵秘抄にも、「根本中堂へ参る道、…観音松の下り松、…滑石水飲四郎坂、雲母谷、…」（三一）と出てくる。さらに武蔵と吉岡一門との決闘の地である一乗寺下り松も近いが、北野神社の近く（二条）ではないかという説もある。また特色ある映画館だった京一会館もこの付近に存在した。

その曼殊院の東北（比叡山頂）に延暦寺があり、根本中堂は国宝である。この寺は伝教大師である最澄が、延暦七年（七八八年）に建立した比叡山寺に始まる。都の良の鬼門（今も家では東北にトイレをつくらないなどの言い伝えがある）に当たり、国家鎮護の寺として（国家）権力と結びつき、重んぜられた。天台座主であった慈円の百人一首歌「おほけなく憂き世の民におほふかなわが立つ袖に墨染の袖」（九五）は特に有名である。法然、親鸞、日蓮など鎌倉新仏教の担い手を輩出し、紀貫之の墓や定家の墓も近く（比叡山横川飯室谷の安楽律院）にある。その定家はよく比叡山にこもっている。その奥の横川はひっそりと静まった地であり、我々には何よりもあの往生要集を書いた、横川僧都と呼ばれた源信が思い浮かぶ。源氏物語でも、光源氏後の重要人物の一人である。

次に鞍馬寺へ向かう。ここは牛若丸（義経）で名高いが、枕草子にも、「近くて遠きもの、鞍馬のつづらをりといふ道」と出てくる。歌では暗しを掛けた暗部山として出てくる。さらに与謝野晶子にもゆかりがあり、記念室がある。隣の貴船神社については、前に触れたことがあるので省略して、南へ行つて、小野寺へ向かう。ここは、小町がここに住んでいたという謡曲「通小町」にもとづいて名付けられたのである。小野、小町ゆえに、小野という地名には必ず小町伝説がある。山科しかり、秋田しかりである。美人といわれているが、真偽のほどは分からない。その西南の神山は京都産業大の近くで、上賀茂神社の真北約二キロの歌枕の小山であり、式子内親王の名吟「時鳥その神山の旅枕ほの語りひし空ぞ忘れぬ」（新古今 一四八四、雑上）がある。その上賀茂神社は、下鴨神社に対するもので、中を櫓の小川が流れ、思わず百人一首の「風そよぐ櫓の小川の夕暮はみそぎぞ夏のしるしなりける」（九八）家隆が想起される。さらに徒然草の賀茂の競馬の舞台でもある。この南の社家の様も情緒がある。ここから岩倉へ戻ると、ここには、あの源氏物語の若紫の巻で、光源氏が生涯の伴侶、最愛の妻となる紫上を見出した北山の某寺に比定される大雲寺の跡がある。先述の鞍馬寺、鷹峯の寺も候補地の一つである。ここは岩倉という地名からも分かるように、旧五百円札の岩倉具視が幽静した旧宅もある。そうして公任の朗詠谷（藤原公任長谷山莊跡）があるのである。次に市内へ戻って今宮神社へ行くと、名物「あぶり餅」が東門を出た所で我々をむかえてくれ、時代劇のロケが思い出される。その南の大徳寺は、一休

## 車で巡る 京都古典史跡めぐり

— 洛北、京都府下 —

前 兵庫県立川西北陵高等学校

小田剛

が再興した寺であり、山門に千利休の像を安置し、そのことが秀吉の忌諱に触れ、利休の切腹の因にもなった寺である。国宝も、塔頭も多く、有名人の墓も多数である。その南の船岡山は歌枕であり、「岡は船岡」（枕草子）の景勝地であったが、後には葬送の地となり、やがて戦略的要衝地ともなったのである。またその南の北野天満宮は、学問の神様菅原道真を祭神とし、天神信仰ゆえに、全国いたる所にある天満宮の本社である。本殿は国宝で、梅や牛で名高い。近くにお土居や紙屋川などがあり、いかにも京都郊外北野という情緒を漂わしてくれる。そこから北の鷹峯へいくと、そこは、本阿弥光悦を中心とした芸術村の地であり、光悦寺もある。その近くの常照寺には灰屋（佐野）紹益・高原の名妓吉野太夫夫妻の墓がある。



○京都府下

まずは京都市の西隣の亀岡からめぐっていきましょう。旧道の山城丹波国境にある酒呑童子首塚から。丹後の大江山の鬼と呼ばれるものは、実際はここ丹波の大枝山の鬼（盗賊など）が移ったものなのである。そして篠村八幡宮は篠の地にあり、太平記（巻九）に尊氏が寝返って、六

波羅（探題）を攻める時に、ここに願文を奉ったとある。さらに西へ行くと、亀岡城跡があり、光秀の築いた城であるが、今は石垣と内濠だけが残っており、城跡は大本教の本部となっている。その近くに頼政塚があり、上に登れば、亀岡市街が一望のもとに見渡せ絶景である。他では丹波国分寺跡や出雲大神宮（神社）があり、いうまでもなく「出雲をうつし」たものであるが、我々国語教師にとっては、何よりも徒然草（三三六段）の、獅子・狢犬の話が忘れがたい。石像ではなく木だ、だから子どもでも動かさせたという説もある。そして亀岡市の郊外に、円山四条派の円山応幸生誕地があり、近くに金剛寺があるが、これは応幸が幼少の頃修業した寺である。応幸は幽霊の絵などで名高いが、贋作も多く、よく「なんでも鑑定団」にニセ物が出てくる。なお師の石田幽汀の墓は、四条大宮近くの寺にある。さらに谷性寺は、桔梗の寺と呼ばれ、光秀首塚があるが、首塚は三条白川下東側にも残存する。

他、京都府下では、園部城跡、明智の智をつたという福智（知）山城（跡）、美山かやぶきの里などもあるが、舞鶴、宮津中心に見ていこう。舞鶴は、田辺城のある西舞鶴と、軍都である東舞鶴とに分かれる。田辺城は細川幽斎・忠興父子で有名である。また舞鶴は何と違って、戦後の引き揚げ者が多く上陸した港町であり、二葉百合子の「岸壁の母」は忘れられない。

そして丹後由良の由良川の川口が由良の門であり、「由良の門を渡る舟人」の曾禰好忠の百人一首（四十六）が思い浮かぶが、和歌山や鳥取にも由良がある。好忠は丹後掾となったので、ここだろうといわれている。

この由良が、安寿と厨子王で知られる森鷗外の「山椒大夫」の舞台である。説経集にもあるが、話の内容は全く異なっている。それは鷗外の「歴史其儘と歴史離れ」を見ても分かる。そして近くに、浦島太郎ゆかりの宇良神社があり、浦島太郎に出てくる亀のいる所は、豊かな漁場であった。浦島伝説は、海の彼方の竜宮城と共に我々におなじみである。海洋民族は海の彼方に理想郷があり、沖繩はニライカナイ、中国は山奥の桃源郷、さらにヨーロッパのユートピア、そしてシャングリラとある。異境・異界ゆえ、人間の支配外で時間の単位がちがいが、理想郷ゆえに不老不死の里でもある。

次は宮津へ行こう。京極高知の宮津城も名高いが、何といても小式部内侍の「大江山いく野の道の遠ければ……」の百人一首（六〇）がよく知られている。この宮津湾は与謝の海とも呼ばれ、与謝蕪村、与謝野鉄幹とその父礼蔵と、地名にかかわりのある人名がすぐに浮かぶ。（細川）ガラシア夫人が隠棲したのは、丹後半島の味土野という所であり、知恩院の前に、「ここはお国を何百里」碑がある真下飛泉も、この近くの大江（町）で生まれたのだった。